

渡辺華山の生き様

藤原 道夫

昨年の秋 TV で渡辺華山の生涯が放映され、興味深く見入った。この人物については「鷹見泉石像」（国宝、東京国立博物館蔵）の作者としてしか知らない。これを機に調べてみた。

華山は寛政五年（1793）田原藩の江戸屋敷邸内で生まれた。幼名は登。父は上士の家柄だったが家禄は少なく病気がちで、幼少時より極端な貧窮の中に育った。少年となった登は、画才を発揮して絵を描いては売り、生計を助ける。この才能が後年数々の傑作を生み出してゆく。国宝の肖像画は華山 45 歳の作品、家老と画家との二足草鞋の生活の中で描かれた。

華山は初め儒学を学び、後に蘭学に興味を抱いた。藩の家老となり、海防掛を仰せつかったことにもよる。蘭学を学ぶ過程で高野長英（1804～1850）らと知り合う。このことが一層私の興味を惹いた。学生時代この反骨精神に富む才気溢れる蘭医・蘭学者について熱心に語る先輩がいた。その長英が華山について次のように評している。

「翁は・・・温順沈実にして博学多才、君に仕えて誠忠を致し、母に仕えては孝順を尽くし、朋友に交わりて信義を重んじ、実にこれ当世の一人物なり・・・分けて交わり厚く、朝夕ともなく往来し、何くれとなく相謀れし」

長英との出会いが華山の運命を変えていったように思う。

年号が天保となる頃より、外国船がしばしば日本沿岸に出没する。国内では飢饉や疫病の流行により人々の生活は困窮し、一揆が多発した。華山は学んでいた備蓄の考えを実践し、藩から一人の餓死者も出さない功績をあげた。一方開国論者の仲間と見なされ、幕府ににらまれる存在となる。開国論者を弾圧する「蛮社の獄」により、華山は蟄居の身となった。かの長英は終身刑となって投獄され、後に脱獄して逃亡生活を送る。

華山はまたしても絵を売って生計を立てざるをえない身となった。そのためには多くの人たちと連絡をとる必要がある。これが幕府による探索の原因となった。それを察した華山は藩に迷惑がかかる事をおそれて自害、享年 49。遺書に「不忠不孝渡辺登」とあったが、藩の人々による評価はその逆だったであろう。